

藝大通信

GEIDAI TSUSHIN



24

MARCH 2012
TOKYO GEIDAI
東京藝大広報誌

佐藤雅彦

受賞教員インタビュー

【第三回】卒業生に聞く。

今日マチ子

【第七回】受賞学生インタビュー

石井亨 浜野与志男 今林由佳

【第十六回】教員は語る

乾久美子 × 菅英三子

【第五回】上野の寄り道散歩道「甘味とスイーツ」

【第三回】研究室探訪

音楽学部邦楽科 能楽専攻

佐藤雅彦

受賞教員インタビュー 第5回

なにげなく見過ごしてきた風景の中に現れる驚きの曲線。

DVDブック『日常にひそむ数理曲線』で日本数学会賞出版賞を受賞。

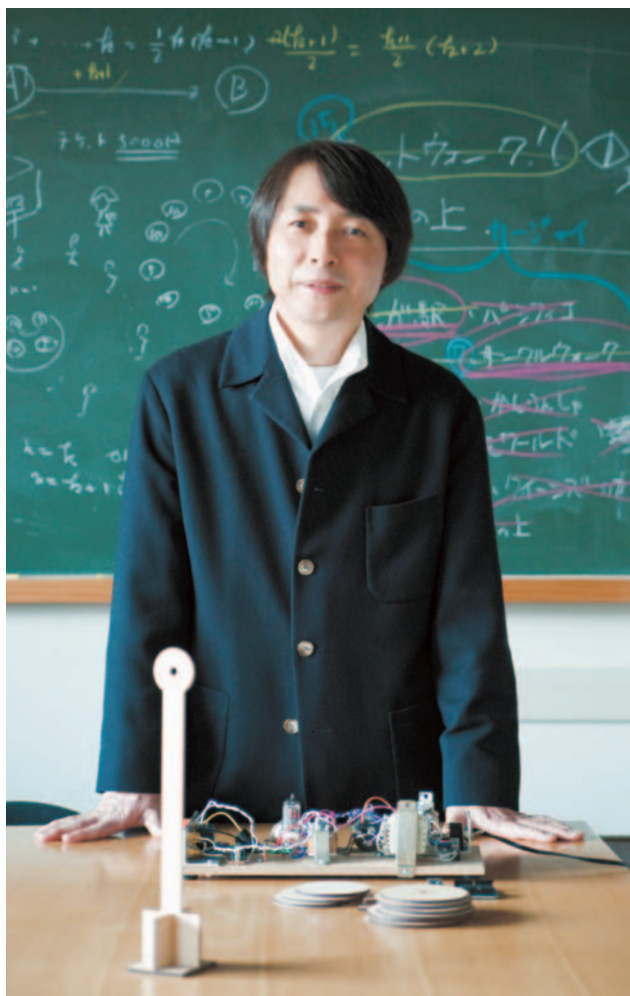


Photo by Hiroaki Horiguchi

映像の形で数の「理」を伝える

この賞は、日本で最も権威のある数学の学会、日本数学会が、著作活動により数学の教育・研究に顕著な業績をあげたものに与える賞です。しかし、正直なと

ころを言いますと、この『日常にひそむ数理曲線』を作っているときには、その存在を知りませんでしたし、受賞の通知が学校に届いたときは驚きました。

このプロジェクトは、私の講演を聴いたベネッセ教育研究開発セ

ンターの役員の方から、新しい教育の形を一緒に研究・開発できないか、というお話があり始まったものです。私が普段から目指していることは、認知科学の知見をもとにした新しい表現や、数学に代表される概念操作を取り込んだ表現です。それらを踏まえ、通常は高校や大学の教養課程で教科書を中心に習う数学や物理学を新しい映像手法を用いて、解き明かそうと提案したのです。

多くの人がサイン、コサイン、タンジェントや双曲線など自分の生活とは全く関係がないと思っていますよね。そのような単純な

第24号 目次

02 受賞教員インタビュー 第5回

佐藤雅彦

04 geidai gallery vol.4

木津文哉 弥生門

06 教員は語る 第16回

乾久美子×菅英三子

09 受賞学生インタビュー 第7回

石井亨 浜野与志男 今林由佳

12 TOPICS

音旬 映旬 美旬

20 卒業生に聞く。 第3回

今日マチ子

22 研究室探訪 第3回

音楽学部邦楽科 能楽専攻

24 上野の寄り道 散歩道 第5回

甘味とスイーツ

26 上野の杜の波瀾万丈 第13回

日本美術の保護 後篇

吉田千鶴子

28 展覧会&演奏会情報

近代洋画の開拓者 高橋由一

藝大プロジェクト2012

30 NEWS 2011.08 ~ 2012.01

編集後記

理由で、数学を遠ざけていたりします。そこで、数学が持っている深さや身近さを、実験室などの特殊な状況ではなく、日常という普通の状況の中で、しかも目が離せなくなるくらいの映像で見せることができないか、と長い間考えていました。漠然と過ごしている日常は、きれいな「理」で動いています。それを難しい理屈ではなく、誰でもハツとするような映像にできないものか。それに対する私なりの答えが、『日常にひそむ数理曲線』といえるかもしれません。例えば、「クロソイド曲線」という言葉は聞いたことがな

くても、車を運転するときに誰もが世話になっている曲線があります。こういう曲線を、「ロトスコープ」という映像手法を用いて可視化するとわれわれの日常に驚くべきものが現れるのです。

「現われ」に対する畏怖

以前、山口情報芸術センター（YCAM）で高校生を対象にこなったワークショップで、トンカチを投げる様子をディスプレイに表示し、それをコマ送りしながら画面にトンカチの重心の位置を示すシールを貼っていくという単純な実験をおこなったことがあり

ます。最初は「何をしているのだろう」という様子で見えていたものが、トンカチの重心がきれいな放物線を描き始めると、みな黙って画面を凝視するのです。それは何かの現れを「畏れる」という感じでした。人間はあるものの出現、消滅にとっても興味を示します。しかも、それが意味を持ったある関係性を示すと、とても見過ごせない状況になるのですね。

実は、このプロジェクトによって、「こんなふうにならないかな」というある絵が頭の中に浮かんでいました。街を歩いているとコンビニの前ですることもなく高校生がたむろしている姿を見かけます。彼らが、たまたま学校のメディアセンターや図書館でこの映像を見たとき、「これヤバイ」と感じてくれるのではないか。「おれマズいもの見ちゃったよ。ぶらぶらしている場合じゃないよ」と友達にも伝播していけばいい、と思ったのです。世の中は全然ユルくなどない。自然や現実とは、畏れうるものであり、厳しくくらいきれいなものだ、ということを押しつけてではなく、自主的に感じてもらいたかったのです。



企画・制作 ベネッセ教育研究開発センター、慶應義塾大学佐藤雅彦研究室
編集・執筆 佐藤雅彦+ユーフラテス
『日常にひそむ数理曲線 DVD-Book』（小学館刊）

藝大通信
No.24
TOKYO GEIDAI
東京藝術大学広報誌
藝大通信 第24号

■編集発行

東京藝術大学 藝大通信編集部

■編集委員

松下 計（美術学部デザイン科准教授・編集長）

斎藤典彦（美術学部絵画科日本画教授）

小鍛冶邦隆（音楽学部作曲科教授）

毛利嘉孝（音楽学部音楽環境創造科准教授）

筒井武文（大学院映像研究科映画専攻教授）

大石 泰（演奏芸術センター准教授）

■アートディレクター

松下 計

■表紙デザイン

堀口宏明

■撮影

堀口宏明、川島保彦

永井文仁（美術学部附属写真センター）

■制作

株式会社 平凡社

■発行日

平成二十四年三月十日

■お問い合わせ先

東京藝術大学 総務課

〒100-8704 東京都台東区上野公園12-18

電話 050-5555-2106

FAX 03-5685-7760

E-mail tolawase@ml.geidai.ac.jp

URL <http://www.geidai.ac.jp/>

佐藤雅彦（さとう・まさひこ）教授

—大学院映像研究科メディア映像専攻

一九五四年静岡県生まれ。七七年東京大学教育学部

卒業。九九年～二〇〇五年慶應義塾大学環境情報

学部教授。〇六年～〇七年同特別招聘教授。〇八年

～同環境学部客員教授。〇六年～東京藝術大学大

学院映像研究科メディア映像専攻教授。

代表作にプレイステーションソフト「DJ」NHK教育

テレビ「2355」「0655」「Jタ「ラズイッチ」など

多数。近著に『考への整頓』（暮しの手帖社）がある。

二〇一二年『日常にひそむ数理曲線 DVD-Book』と日

本数学会賞出版賞を受賞。





技術と表現は自転車の両輪

乾 私は東京藝大が母校で卒業後も非常勤講師を務めてきました。

これは藝大だけの問題ではありませんが、十年ほど前でしょうか、建築科は受験生にとても人気があった時期があり、そのピークを境に志望者が減ってきています。日本の産業において、これまで建設業界はGNPで大きな比重を占めていましたが、公共工事も少なくなってきた、建築ではなかなか食べていけないという状況が受験者数にも影響しているわけです。いまの学生を見ると、意識が高くこちらから教えない学生が増えていて、反対にそうでない学生に完全に二分化されています。

建築は座学が必要なジャンルですから、ある程度、勉強が好きでないとやっていきません。構造力学や建築工法という工学的な要素を学ぶ姿勢が必要とされるのです。さらに、建築設計を行うためには国家資格が要りますから、その試験にも合格しなければなりません。そのため、大学のカリキュラムでは免許を取得するための技術や知識を教えるということが前提なのです。その点においては芸術系も工学系も変わりなく、似たようなカリキュラムを組んで教育をしています。東京藝大ではそうした建築設計を学ぶ基礎的なカリキュラムをベースにしつつ、デザイン的な教育を他大学以上に充実させているということになると思います。

菅 私の出身校は京都市立芸大で、今回着任するまで、東京藝大とはかかわりがありませんでした。たまたま、オペラの練習会場になっていたために音楽ホールに入ったことがある程度で、実は、奏楽堂も着任後に初めて入りました。現在教えている学生は一年生が主で、二年生、

三年生も受け持っています。どの学生も受験までのあいだに、基礎の段階から自主的に、目的を持って学んできていると感じます。こちらの指導に対して反応が積極的な点は特筆すべきでしょうね。

京都市立芸大を卒業後、ウィーン国立音楽大学で学んだのですが、日本とヨーロッパにおける音楽教育のいちばんの違いは、常に受け身ではなく自ら発信していくことが要求される点であったと思います。ヨーロッパで最初に出会った先生に「まちがってはいないけれど、全部たらない」と言われたことがいまでも忘れられません。「あなたはこの歌をどのように感じてどのように歌いたいのか。あなた自身はわかっているのだから、聴いている人にもわかるように歌って」と。そして、「まだ足りない」と繰り返し言われているうちに、少しずつ自己表現ができるようになっていったと思います。

たとえば、音階、ドレミファソラシドを歌うにしても、ヨーロッパではそれ自体が音楽になっています。つまり、単なる音の練習にとどまるのではなく、音階のつなげ方が自分の表現になっているのです。日本人のある器楽演奏家がヨーロッパのオーケストラのオーディションを何度受けてもうまくいかないのです、その理由を尋ねたところ、「技術的な水準はとても高いが、どんな音楽を演奏したいかがわからない。だからきつと、ぼくたちのオケとは溶け合わないだろうと判断した」と言われたそうです。

ただ、技術と表現は自転車の両輪のようなものですから、どちらかが大きくてもうまく走りません。テクニックがあれば十分に表現は伝わらないし、かといって、技術があれば伝わるわけでもなく、自身の内側から湧き出てくるものがないといい音楽にはならないのではないのでしょうか。ですから、どちらも同じくらい大事

第16回

教員は語る

音楽学部音楽科 准教授

菅英三子



演奏中の菅英三子准教授（共演はライナー・ホフマン氏）



乾久美子

美術学部建築科 准教授

藝大への期待・抱負・提言



「フラワーショップH」(日比谷花壇日比谷公園店) 阿野太一撮影

国境を越える視線と感覚

だ、ということを私自身も学生に教えていきたいと思っています。

乾 音楽家の方も同じかもしれませんが、建築家にとって、どれだけ多く優れた建築を見たかが、その後の設計の能力にかかわってくるといっても過言ではありません。学生には、日本の建築と西洋の建築の両方をバランスよく見てもらいたいと思っています。

建築において、日本は非常に不幸な国で、日本の伝統的な建築は世界でも稀に見るほどの高度な水準にあったにもかかわらず、明治時代以降、日本のそれまでの伝統建築の歴史を完全に断絶してしまったのです。具体的に言えば、火事や地震に対応せざるを得ない現実があり、それまでの木造ではなく、鉄やコンクリートで建物をつくるのが国策になってしまった。つまり、急速な近代化と西洋化により、日本の伝統建築や工法が、一般の方にとって日常のものとしてとらえられなくなってしまったという側面があります。

同じ建築の中で、木造とRC造や鉄骨造ではずいぶん雰囲気違います。たとえば、ル・コルビュジエに代表されるような近代建築家たちの建築は鉄とコンクリートを基本としていますから、それと比較すると、日本の木造建築は全く違うジャンルのものに見えてしまいます。一般の方がそこに結びつきを探ることが難しいわけです。ただ、建築は単なる見た目だけではなく、寸法や収まりなどが追及されており、人の「居心地」を重視してデザインされています。そこに着目すれば、どの時代のどんな建築でも同じようにその良さを味わうことができるはずなのです。

菅 音楽の状況もとてもよく似ています。明治時代になって西洋音楽を取り入れるにあたり、当時の文部省が、讃美歌や欧米の民謡に日本語の歌詞をつけて「文部省唱歌」として学校で歌わせたとききました。

私は「文部省唱歌全集」のCD化にかかわっており、そのときに気づいたことがあります。明治時代に、私たちの何代か前の方々は、それ以前に日本人が感じていた音楽とは全く異なる、「十二音階」に「はにほへといろは」をあてはめた音階で音楽を勉強してきました。そこで、本来であれば、日本的な音楽と西洋的な音楽がうまく混ざり合い、民族のアイデンティティーが熟成されていけばよかったと思うのですが、おそらく当時はそれで精いっぱいだったのでしょう。その後いくつもの日本語の歌詞を持つ声楽曲がつけられますが、音楽学部の前身である東京音楽学校を卒業された山田耕筰先生あたりから、日本語の抑揚を音に乗せるということに辿りついたといわれています。ですから、西洋音楽を日本の言葉で歌うということは、まだまだ本当に歴史が浅いのですね。

私自身は、留学したドイツ語圏の、十八世紀や十九世紀の音楽を中心に演奏活動をおこなっています。こういう音楽は、日本からは距離がありますし、時代も隔たっているにもかかわらず、現代に生きる私たちを感動させてくれます。本当に優れたものは、何百年もの時を越えて残っています。ですから、西洋的なものでも、日本人だからこそできる吸収の仕方があると思うのです。世界がグローバル化して国境がなくなったように、しかし実はそれとは逆に、民族性は凝縮され、深まっていくのではないのでしょうか。

実は、私が実際にヨーロッパの言語で、ヨーロッパの舞台に立って歌ったときに、日本人の

私だからこそできる西洋音楽を目指さないとウソだと思ったのです。借り物で同じことをしていても、そこで生まれ育った人と同じことはできませんし、同じことをしていてもあまり意味はない。そうではなく、私だからこそ感じられる音楽や言葉を表現したいと思ったとき、自分ならではの音楽で民族の壁を越え、一緒に舞台の上でコラボレーションすることができると思うのです。

音楽ホールにおける「響き」とは

菅 これまで日本各地の数十カ所の演奏会場で歌っていると思うのですが、私は、音楽ホールでは上野の東京文化会館の大ホールがいちばん好きです。このホールは、大きく声を張り上げなくても隅々にまで声が届くからです。



たとえば、一般的に「響きがいい」と言われている日本の音楽ホールには、音響をよくするために意図的に残響を長くしているところがあります。それが人工的になりすぎると残響が邪魔になる場合があり、ホールに合う響きにするため、演奏者の側が本来必要のない作業を強いられることがあります。たとえば、ピアノの場合、ペダルの使用を少なくする、というようなことです。

ところが、東京文化会館の場合は、演奏したい音楽に対して、そのままホール全体が合わせて鳴ってくれるような感覚を持つのです。同じようなことをおっしゃる演奏家の方がほかにも何人もいらつしました。

また、音響に定評があるほかのホールでも、座る場所によって聴こえ方が違う場合があります。東京文化会館はそういうこともなく、どの席で聴いても同じようにステージから音が飛んでくるのです。

乾 いまお話を聞いていておもしろいと思ったのは、新しいホールほど音響設計の技術が上がっているはずにもかかわらず、一九六〇年代に竣工した東京文化会館のほうが、コンピュータで綿密にシミュレートしたホールに、音響的に勝っている点です。すばらしいですね。

音響設計とは別の次元で、東京文化会館や、同じく前川國男さんが設計した神奈川県立音楽堂は音楽の演じ手と聴き手の距離が近いという感じを受けます。六〇年代の素朴な時代の建築は音楽ホールにかぎらず、美術館にせよ、図書館にせよ、サービスの担い手と受け手との間の距離が近い感じが建築のデザインにも随分あらわれていて、とても好きです。

ところが、それ以降の建築になると、ホールが特に顕著ですが、いろいろな側面でハイスベックになり、ひとつの楽器としての劇場は高

級になったかもしれませんが、演じ手と聴き手との距離を離してしまような心理的な壁を築いてしまったように思います。国が豊かになることの象徴として建設が行われていたような時代では、状況がそうした心理的な壁をわざとつくるような高級な仕様を望んでいた側面もあるのでしょうか、今、少なくとも若い人はそうしたものを望んでいないように感じます。新しいホールの快適さもあるとは思いますが、もう少し素朴に音楽を味わいたいという欲求は、聴き手だけではなく、演じ手のほうにも出てきているのではないのでしょうか。

音楽ホールのみならず美術館でも公共建築でも、バブルのころにそうしたハイスベックすぎる建築が多く生まれてしまい、その反省から、現代の建築設計の流れとしては、より素朴な建築のあり方を探る方向に向かっていますね。音楽ホールもこれからは、もしかしたら東京文化会館のようなローテクな造り方が見直されるのかもしれない。

菅 私は、実家がプロテスタントの教会なので、プロテスタント系の教会や礼拝堂からコンサートへの依頼を受けることが多いです。こういう建物の場合は、やはり残響が多くて、普通のコンサート会場だと残響が〇・何秒から一・二秒ほどのところ、教会になると一・八から二・二・三秒ほどのところが多いです。すると、教会音楽として発展してきた音楽とすごく合っているのですよ。オーケストラや器楽曲、声楽やオペラに比べると、教会音楽は和声的にもシンプルでポリフォニックな構造なのですね。そういう音楽を演奏するには、教会の残響はとてもよく作用してくれるのです。

仙台にある実家の教会は、天井が高く、残響はどこで聴いても二・八秒あります。これは教会のなかでもかなり響くほうで、お説教などを

語るには難しいですし、現代的な音が重なる音楽を演奏するには不向きですが、宗教音楽のよ

うな古い時代の音楽にはとてもよいのですよ。ところで、私は生まれが岩手県の水沢市（現・奥州市）で、小学校から仙台で育ちました。今回の東日本大震災で実家は丈夫でしたが、姉の家は亀裂が入り引越しました。音楽学部の教授会で、藝大の先生や学生が被災地の支援をしてくださった話が出るのですが、私はその度に泣きたいほどうれいいます。いまでもそうして震災を忘れずに支援してくださることは、とてもありがたいと思っています。

菅 英三子（すが・えみこ）

音楽学部音楽科 准教授

一九五九年岩手県生まれ。八二年京都市立芸術大学音楽学部卒業。九一年ウィーン国立音楽大学リット・オラトリオ科卒業。九一年〜九七年ブラハ国立歌劇場客演契約歌手。九四年フレイマーハーフェン市立劇場客演契約歌手。二〇〇一年〜一年京都市立芸術大学音楽学部准教授。京都市音楽家協会賞、ザルツブルク市音楽奨励賞、オーストリア共和国文部大臣賞、青山音楽賞、出光音楽賞、新日鉄音楽賞、宮城県芸術選奨、文化庁芸術選奨新人賞などを受賞。二〇二二年より現職。

乾 久美子（いぬい・くみこ）

美術学部建築科 准教授

一九六九年大阪府生まれ。九二年東京藝術大学美術学部建築科卒業。九六年イェール大学大学院建築学部修了。九六年〜二〇〇〇年青木淳建築計画事務所勤務。〇〇年〜〇一年東京藝術大学美術学部建築科常勤助手。昭和女子大学、東京大学大学院、京都工芸繊維大学、東京藝術大学美術学部、早稲田大学理工学部、The University of British Columbia School of Architecture、The Oslo School of Architecture and Design、非常勤講師を務める。〇八年「アパートメント」で第二十四回新建築賞受賞。一〇年「フラワーション」で日本建築士会連合会賞優秀賞、およびグッドデザイン金賞を受賞。二〇一一年より現職。

第80回日本音楽コンクールピアノ部門第1位

浜野与志男

◆音楽学部器楽科(ピアノ)4年

日本音楽コンクールの本選では、プロコフィエフのピアノ協奏曲第2番を演奏し第1位をいただきました。この協奏曲を初めて弾いたのは海外で、国内では2009年に大友直人先生指揮・東京交響楽団とよすか芸術劇場で、また2011年5月にも山田和樹先生指揮による藝大フィルハーモニアと奏楽堂のモーニングコンサートで演奏しています。とても深い形而上学的な内容さえもつ難解な曲なのですが、「オーケストラとの対話があり、また溶け合うところもあり、圧倒的な感動があった」との評価をいただきました。

僕は東京生まれ東京育ちですが、母はロシア・モスクワの出身です。日本音楽コンクールの本選でプロコフィエフを選んだように、母から受け継いだ血のせいかな、これまで何かとロシア音楽に注力してきた側面がありますが、価値ある芸術家に成長するためにはロシア音楽だけで

は全く不十分ですし、決してロシア音楽専門の音楽家になりたいわけでもありません。バロック期の音楽から現代を生きる作曲家の音楽まで、空白を残さず挑戦していきたいと思っています。

それでも、近年、関心が高まってきたロシア音楽の魅力を伝えていきたい気持ちはあります。シューマンやブラームスに代表されるドイツ・ロマン派の音楽は個人の内面性が強く表れていますが、それに対し、ロシア音楽は一個人という枠を超えた、何かとてもスケールの大きなものに手を伸ばしたいという願いが脈々と熱く息づいている音楽であると感じていますから。

東京藝大の附属音楽高等学校を卒業後、引き続き東京藝大へ進学したことは本当に正しい選択だったと思います。器楽科(ピアノ)の仲間とはこの7年間、高いレベルで切磋琢磨することができました。他科でほかの楽器に取り組んでい

る先輩、同級生、後輩からも刺激を受けますし、美術学部の方々とチャリティコンサートの共同制作などを通じて協業することができました。また、学内演奏会やモーニングコンサートのように、一般の皆様の前で演奏する機会が与えられるのも藝大ならではのことでしょう。

僕は自分のためだけの音楽という視点ではなく、音楽で何ができるかを幼いころから長い間考えてきました。少々ナイーブかもしれませんが、世界中で最も辛い思いを強いられている方々を支え続けることも、音楽芸術の使命の一つであると信じています。その考えに共感してくれる仲間とともに、バングラデシュ支援のチャリティコンサートを催し、東日本大震災の被災地での演奏会も開催しています。音楽に限らず、芸術とは社会に根ざした存在であり、芸術には人の心を癒すだけではなく、人々にヒントを与え、奮い立たせる力があると思うのです。



第80回日本音楽コンクール
(2011年10月) 本選での演奏
© 毎日新聞社提供

はまの・よしお

1989年東京生まれ。桐朋中学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業。これまでにピアノを石本裕子、M.プロジロフ、松本裕子、V.サハロフの各氏に、室内楽を伊藤恵、川中子紀子の両氏に師事し、現在はピアノを岡田敦子、E.アシュケナージ、御木本澄子の各氏に師事。2011年夏、「ロシア音楽国際ピアノコンクール」第2位およびロシア音楽最優秀演奏賞。同年10月、「第80回日本音楽コンクール」第1位、併せて岩谷賞(聴衆賞)、野村賞、井口賞、河合賞を受賞。



藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

イセカルチュラルファンデーション 第7回「美術学生展 in NY 2011」デビッド・ソロ賞

石井 亨

◆大学院美術研究科博士後期課程美術専攻（工芸・染織）1年

幼稚園のころからサッカーづけの日々で、将来の夢はプロになり世界で活躍することでした。小学校では学外のクラブに所属していました。絵も得意で校内の写生会で金賞を受賞しましたし、学校の成績は体育と美術だけは5でした。高校はサッカーが強く、美術も学べる埼玉県立伊奈学園総合高等学校に進学したのですが、部員は100人ほどいて、同級生にも中学時代の有名クラブの選手が集まっているのを見て、まもなくサッカーは諦めました。そこで今度は、美術で世界を目指そうと東京藝大へ進学することにしました。

小学校のころから一緒にサッカーをしていた仲間たちは、日本代表、さらには世界を目標にしている人ばかり。幼馴染みに後に日本代表となる佐藤勇人、寿人兄弟もいて、2人が次第に有名になっていくのを傍で見っていました。サッカーを諦めた友人たちもそれぞれの分野で世界を目指すという意識は変わらず、とてもよい環境にい

たと思います。

藝大入学前の進学予備校では、コム・デ・ギャルソン、イッセイ・ミヤケといったファッションブランドの国際的評価を知り、テキスタイルに興味を持ちました。憧れの対象が、それまでの三浦知良選手や中田英寿選手から、川久保玲さんや三宅一生さんになったのです。藝大でも工芸科（染織）に進むと決めていました。

友禅染は、江戸時代中期に奢侈禁止令が出され、豪華な金糸や手の込んだ刺繍が禁じられたとき、反物を染だけで鮮やかに彩る技法として編み出されたとされています。マスキングにもち米糊を使い、豆乳で染めるなど、極めて日本的な素材を使います。フラットで「ライン（輪郭）」がはっきりしているうえ、なによりも美しい「発色」が特徴です。卒業制作は、幅1メートル、長さ4メートルの生地を5本、暖簾のように垂らし、それが一枚の絵画のように見えるという作品でした。伝統的な

友禅染の技法で、人物と都市の構造を「グラフィティ」（スプレーやフェルトペンなどを使い、壁などに描かれた落書き）調のモノクロによって描き、「音」を表現したつもりです。

今回受賞した賞はアメリカと日本の学生が応募して競い合うもので、多くの作品を選んでくださったデビッド・ソロさんは著名なコレクターの方だそうです。メディアや観衆の賞ではなくコレクターから評価されたことにビックリしましたし、素直にうれしいですね。2011年は夏から秋に東京オペラシティアートギャラリーで個展も開催し、そのこともあり、外資系のコーヒー・チェーンから、コミッションワークの依頼があるという反響もありました。

将来的にはイギリスかアメリカを活動拠点にしたいですね。日本の伝統技法のひとつである友禅染は、世界に出ていくための「最強の資源」になるのではないかと考えています。



いしい・とおる

1981年静岡県生まれ。東京藝術大学美術学部工芸科（染織）を経て、同大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻（染織）修了。2007年、「第8回スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル」で審査員奨励賞受賞。2008年、切尔西・カレッジ・アート・アンド・デザイン修士課程テキスタイルデザイン科交換留学。2010年、ミヅマ・アクションで個展を開催。2011年、東京オペラシティ アートギャラリーで「project N 46 石井亨」を開催。同年「イセカルチュラルファンデーション 第7回「美術学生展 in NY」」でデビッド・ソロ賞を受賞。



「再保存 - 衡立鷹模様」

友禅染 / 絹 / パネル / 107x107cm / 2011



アニメーション「おにしめ おたべ」の1シーン

いまばやし・ゆか

1985年千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部絵画科(油画)卒業。2011年、「おにしめ おたべ」で「富山水辺の映像祭2011」グランプリを受賞。同作品で「取手野外映画祭2011」ショートショートフィルムコンテスト大賞および取手市長賞、「ASIAGRAPH2011」公募第二部門で優秀作品、2012年、「第11回東京アニメアワードコンペティション」で学生部門／優秀賞を受賞。その他受賞等多数。

富山水辺の映像祭2011 グランプリ

今林由佳

◆大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻2年

美術の世界を目指したのは、高校1年生のとき、初めての美術展「横浜トリエンナーレ」で束芋さんの作品を観たのが大きなきっかけでした。テレビで見るアニメとは違う“動くイラストレーション”が、海外の人に評価され、アートとして大人も楽しんで観ていることに衝撃を受けたのです。イラストを描くのが好きだった私は、これなら「美術」にかかわれるかもしれない、と思いました。

進学予備校で油絵の魅力に惹かれ、表現方法を自由に選べると思い、東京藝大の美術学部絵画科(油画)に進学しました。いざ入学してみると、アニメーションの作り方がわからず、代わりに油絵や色鉛筆、水彩、木版、リトグラフ、シルクスクリーンなどさまざまな画材や技法を使って絵本をつくっていました。しかし、アニメーションへの憧れを捨て切れず、新設された大学院映像研究科のアニメーション専攻への進学を目指し、卒業制作はアニメーションで取り組むことにしました。

卒業制作は、芸術作品としての評価が得られるものではありませんでした。しか

し、家で観るようにじっくりと見てくださったご夫婦や親子など、来場者の方から「あたたかいね」「優しい作品だねえ」「涙がでちゃった」との言葉をいただき、評価の幅に戸惑いつつ、アニメーション表現への想いを強くしました。

希望どおり大学院映像研究科アニメーション専攻へ進学することができ、岡本美津子教授の指導を仰いでから、私の作品は、アートの文脈に限らず、誰でも気軽に触れられる「メディア」とおとした表現により近い、と自覚するようになりました。岡本教授は、誰に向けて、何を伝えたいのか、メッセージを明確化し、加えてそこに新しさがあるのかを必ず問います。グランプリをいただいた作品「おにしめ おたべ」も、教授の客観的視点と、新しさへの挑戦の後押しがあり完成しました。

グランプリをいただいた「富山水辺の映像祭」のテーマは「笑顔」でした。そのテーマから、作品の中心をまっすぐに評価していただける映像祭と思い応募したので、グランプリ受賞は本当にうれしかったです。「おにしめ おたべ」は、家族のためにお煮

しめをつくる母親とそれを横でみている子ども、その料理ができあがるまでを描いた短編アニメーションです。画面には食材とお鍋しか出てきません。食材のきぬさやが魚であったり、にんじんがカニであったり、そういう見立てを楽しみながら、食材ひとつひとつが命そのものであること、また家族がともに食事できることの喜びの気持ちを込めて制作しました。

私の夢は、アニメーションづくりが養護教育に生かされる道をつくることです。アニメーションは、写真や絵の積み重ねからなるので、根気強く取り組み、映像の尺(長さ)となって現れ、努力は実を結びます。完成した作品の上映会をすれば特別な一瞬に出会い、共有する歓びや自己肯定感を得られると思います。さまざまな映像が溢れる今、音と映像の原理や不思議さを体感し、仮想世界を現実につなぐ力がアニメーション教育にはあると感じます。何よりつくる楽しさがそこには待っています。そのような機会をつくる担い手になればと思います。

竹山愛さんCDリリース

「藝大アーツ イン 東京丸の内」の演奏風景等



藝大フィルハーモニアが
ナクソス・レーベルで
CDデビュー
CDジャケット

TOPICS OF
MUSIC

2011.08 - 2012.01

音旬

藝大フィルハーモニアが ナクソス・レーベルでCDデビュー 日本作曲家選輯 東京藝術大学編

十二月九日、本学は、自身の東京音楽学校の作曲科主任教授であった橋本國彦の晩年の名作「交響曲第二番」、親鸞聖人の浄土和讃をもとに作曲された「三つの和讃」などを収録したCDを、ナクソス・レーベルからリリースした。日本人作曲家の貴重な作品を広く世に紹介するシリーズ企画である「日本作曲家選輯」で「東京藝術大学編」という独自の企画を提案し、実現させたもの。

藝大フィルハーモニア（音楽学部管弦楽研究部）が演奏し、演奏芸術センターの湯浅卓雄准教授が指揮、バリトン・ソロを音楽学部声楽科の福島明也准教授、録音・編集は亀川徹教授をはじめとする同音楽環境創造科のスタッフ、解説は同楽理科の大角欣矢教授と福中冬子准教授、同音楽研究センターの三枝まり教育研究助手らが担当している。さらに、美術学部デザイン科の松下計准教授がカバー・デザインをおこ

竹山愛さんCDリリース

昨年三月に本学大学院音楽研究科修士課程を修了した竹山愛さん（フルート）のCD「プレイズ・パリ」（企画・制作…（株）ソニー・ミュージックダイレクト、販売…（株）ミュージックエンターテインメント）が十一月十六日にリリースされた。

このCDは、本学と三菱地所株式会社が共催で、毎年秋に東京丸の内丸ビルで開催している「藝大アーツ イン 東京丸の内」が開催五周年を迎えた記念に全国発売されたもの。

「藝大アーツ イン 東京丸の内」では、本学を卒業した若い芸術家を支援するため「三菱地

なうなど、演奏から録音、解説、デザインに至るまですべて、本学の教員の手で制作した画期的なCDである。今回のCDは、ナクソスの世界的なネットワークにより、日本国内はもとより、世界六十カ国を超える市場に「東京藝術大学ブランド」として出回り、本学の名を広く世界へ発信することになる。



グラーフ・ピアノ ワークショップ
《グラーフ・ピアノの魅力に触れる》

ワークショップの様子

4



世界音楽週 2011

中央音楽学院にて

3



5

管楽器

ミュージックセミナー

国立磐梯青少年交流の家にて

所賞」を設け、受賞者記念リサイタルをおこなってきた。今回は、過去四回の受賞者から一名を選考し、CDを企画・制作することとさらなる飛躍を後押しした。

3

世界音楽週 2011

十一月二日から五日までの間、中央音楽学院（中国・北京）で、本学音楽学部との協力ののもと、「世界音楽週」が開催された。

「世界音楽週」は、本学の芸術国際交流協定校である中央音楽学院が毎年開催している学術的な音楽文化事業。二〇一一年度のテーマは「日本」であり、音楽学部が日本側パートナーとして全面的に協力した。

音楽学部は、講演、研究発表、ワークショップ、コンサートなどのさまざまな形で日本の伝統音楽および近現代の音楽を紹介し相互交流を深め、なかでも三味線音楽を体系的に紹介したコンサートは、そのプログラムの完成度と演奏の質の高さで中国側に大きなインパクトを与え、大変好評を博した。

4

グラーフ・ピアノ ワークショップ

《グラーフ・ピアノの魅力に触れる》

本学で昨年購入した、コンラート・グラーフが一八三九年に製作したフォルテピアノを用い、音楽学部器楽科（古楽）主催で学内向けに全五回のワークショップを展開した。

野々下由香里准教授とフォルテピアノの小倉

貴久子非常勤講師が案内役となり、テーマに応じて他科よりゲスト講師を招き、ミニ・レクチャー&演奏およびミニレクチャー、体験コーナーの三部構成で、グラーフ・ピアノの魅力に迫ろうとしたもの。

七月二十二日の第一回「紹介・導入編」、十月二十八日の第二回「歌曲」、十一月十五日の第三回「ベートーヴェン 後期ピアノソナタ」、十二月十三日の第四回「弦楽器による室内楽の愉しみ」、そして、二〇一二年二月八日の最終回「管楽器の世界」と続き、六オクターヴ半の鍵盤と四本のペダルは、演奏家にさまざまな示唆を与えてくれた。

5

管楽器ミュージックセミナー

十月二十九日と三十日の二日間、福島県猪苗代町にある国立磐梯青少年交流の家において、本学と共催で、福島県内の中高生管楽器奏者を対象にしたミュージックセミナーが開催された。

このミュージックセミナーは、一九九二年よりほぼ毎年同時期に、本学の教員と学生が講師として中高生に対する演奏の技術指導をおこなっているもの。

今回の受講生は百十五名。本学からは、杉木峯夫教授と岡崎耕治招聘教授に、大学院生と学部生の学生二十名を加えた合計二十二名が参加し、学生によるアンサンブルと熱心な指導により、受講生にとって大変有意義なセミナーとなった。



東日本大震災の被災地にて。取材先で立ち寄った廃屋に持ち主不明のアルバムが集められていた



「なみのおと」より

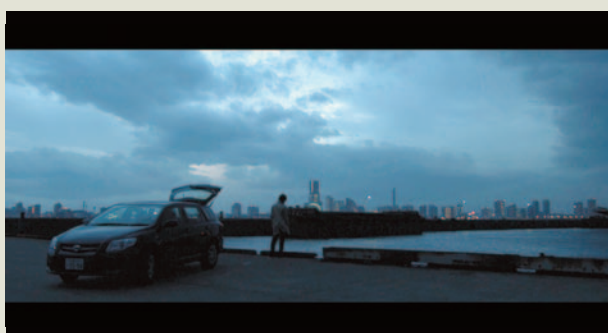


酒井監督の取材風景

東日本大震災復興アーカイブ支援プロジェクト

映画専攻

1



『THE DEPTHS』(監督:濱口竜介) ©東京藝術大学・韓国国立映画アカデミー



『可愛い女』(監督:早坂亮輔) ©東京藝術大学

OPEN THEATER 2011

映画専攻

2

公開講座一馬車道エッジズ 「コンテンポラリーアニメーション入門」

アニメーション専攻

3



公開講座「OPEN TRADITION」

アニメーション専攻

4



TOPICS OF
FILM AND
NEW MEDIA

2011.08 - 2012.01

映画旬



馬車道コンサート
第4回「木管五重奏」の演奏風景

5

三月十一日、地震・津波・放射能という三重の災害が東北地方を襲い、TVやインターネットを通し衝撃的な映像が伝えられてきた。しかし、それらの多くは報道機関が伝える被災の映像であった。被災地の市井の人々の口から語られる現実および証言、復興の様子を記録し後世に残すこと。それこそが、今、映像研究科としてできること、すべきことだと考え、現地で被災者の方々と向き合い、映画・映像としてどのように震災にかかわることができるのか、新たな種類の希望を写し撮ることができるとのか、模索しながら今後も活動を続けていく予定である。

2

OPEN THEATER 2011

◎映画専攻

十月九日から十日までの間、本学横浜校地馬車道校舎において、「OPEN THEATER 2011」を開催した。

横浜市との共催で文化芸術創造都市づくりの推進事業としておこなわれた本イベントは、今回、インターネット上で事前投票をおこない、その結果を受けて上映作品を決定した。上映作品は、『SOLARIS』『彼方からの手紙』『THE DEPTHS』『可愛い女』『しんしん』『夕映え少女』の六作品で、二日間合わせて二百八十名の来場者があった。

3

公開講座「馬車道エッジズ」 「コンテンポラリー」 アニメーション入門」

◎アニメーション専攻

九月十八日、本学横浜校地馬車道校舎において、公開講座「馬車道エッジズ」コンテンポラリーアニメーション入門」第七回講座を開催した。現代の短編アニメーションの状況を作家、作品を中心に紹介する本講座は、今年で三期目に入った。

第七回講座は、『マイブリッジの糸』と題し、カナダからNFB（カナダ国立映画制作庁）のプロデューサー、マイケル・フクシマ氏を迎え、本学の山村浩二教授がNFBとの共同制作の中で、監督として今年完成させた『マイブリッジの糸』を巡り二人で講義をおこなった。

十月八日には、第八回講座『キャロライン・リーフ、描くこと、動くこと』と題し、イギリスからアニメーション作家、キャロライン・リーフ氏を招聘し、寡作ながらアニメーション史に大きな足跡を残した彼女の作品群を自ら解説していただくなど、大変好評であった。

4

公開講座「OPEN TRADITION」

◎アニメーション専攻

十月一日、本学横浜校地馬車道校舎において、日本のアニメーション黄金期に活躍された小田部羊一氏を講師としてお迎えし、公開講座「OPEN TRADITION」を開催した。

本学から生まれた才能が日本のアニメーションに受け継いだ「伝統」をテーマにしたこの公開講座は、第一部で、小田部氏が原画を担当した「太陽の王子ホルスの大冒険」を35ミリフィルムで上映し、続く第二部の講演では、司会に本学の伊藤有彦教授、モデレーターにイラン・グエン非常勤講師を加え、前田青邨門下で学ん

だ本学美術学部絵画科（日本画）時代から、東映動画時代、そして、名作アニメーションでのかわりや、任天堂時代におけるアニメーションとのかわりなどについて、本学の先輩として、小田部氏から貴重な体験談を交えたお話をうかがった。

さらに、現在アニメーション専攻で学んでいる学生たちへの貴重なアドバイスもあり、学生にも、また一般参加者にとっても有意義な時間となった。

5

馬車道コンサート

七月二十二日から十一月十八日までの間、歴史的建造物である本学横浜校地馬車道校舎（旧富士銀行横浜支店）において、横浜市との共催で文化芸術創造都市づくりの推進事業として毎年度開催している馬車道コンサートを今年度も開催した。

今年度は、同校舎のエントランスホールを利用し、本学音楽学部の教員および学生による、「ホルン三重奏」（七月二十二日）、「ピアノ・リサイタル」（九月十四日）、「サクソフォン四重奏」（十月十四日）、「木管五重奏」（十一月十八日）の四種類のコンサートをおこなった。

このコンサートは幅広い年齢層の支持を受けており、勤め帰りのサラリーマンも鑑賞できるよう配慮し開演を十八時三十分としたところ、合わせて約二百五十人の来場者があり、次年度開催の予定を尋ねられるなど、好評を得ることができた。

音楽学部の協力を得て開催してきたこのコンサート事業は、すでに地域に定着しているといえる。

1

東日本大震災復興アーカイブ 支援プロジェクト

◎映画専攻

本学大学院映像研究科では、研究科内に震災復興記録映像制作チームをつくり、せんだいメディアテークの「3がつ11にちをわすれないためにセンター」と協力しながら記録映像の制作をおこなった。そして、報道機関に頼らず市民や専門家が被災地復興の様子を記録・情報発信するという、通称「わすれん」プロジェクトで撮影された「なみのおと」（監督・濱口竜介、酒井耕）が山形国際ドキュメンタリー映画祭で上映された。



こよみのよぶね

TOPICS OF
FINE ARTS

2011.08 - 2012.01

美旬



ササクス Plus+



隅田川新名所物語 2011



記憶の森 映像展



油絵茶屋再現



イノベーションプロジェクト



下町で発生した見世物、エスプリ展

GTS(藝大・台東・墨田) 観光アートプロジェクト

1



MIST



GTS音楽コンサート



東京スカイツリー®を描く絵画展



GTSシンポジウム

1

GTS（藝大・台東・墨田）観光 アートプロジェクト

平成二十二年度から二十四年度までの三年間の計画でスタートした、本学と台東区、墨田区の三者共催による地域連携事業、GTS観光アートプロジェクト。

二年目の今年度は、「アート環境プロジェクト2011」や「隅田川Art Bridge 2011」の二本の事業を柱に、十月から十一月にかけて東京スカイツリーと浅草界隈を結び、隅田川を挟む台東区と墨田区の両地域を舞台としてさまざまなイベントが盛大に開催された。

東京スカイツリーを望む四カ所に設置された環境アート作品とアートベンチを巡り、「隅田川新名所物語2011」「アートサイトクルージング（ササクスPlus+、こよみのよぶね、油絵茶屋再現）」「下町で発生した見世物、エスプリ展」「記憶の森映像展」「イノベーションプロジェクト」などの展示、インスタレーション、パフォーマンス、そして「MIST」チームでは、空、風、土、光に着目した作品群やパレードなど、道行く人々が足を止め、作品に触れ、アートに関心を抱く姿が至るところで見受けられた。

そのほか、「GTSシンポジウム」や区民参加型の「東京スカイツリー®を描く絵画展」、また「GTS音楽コンサート」なども両区内の企画会場で実施された。



穴窯



学生ワークショップ



陶芸制作デモンストレーション



野焼き



国際陶芸教育交流展



窯出し

国際陶芸シンポジウム 2011 in Japan

2

2

国際陶芸シンポジウム 2011 in Japan

九月十七日から二十八日までの間、本学および国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、本学美術学部の主催で、国際陶芸シンポジウム 2011 in Japan が開催された。

この国際陶芸シンポジウムは、アジア、中近東、ヨーロッパ、北米、南米の陶芸教育者が集まり、陶芸教育を中心に、各国の陶芸文化交流と学生交流を目的としている。

今回、東京でおこなわれたシンポジウムには、世界十カ国、二十六大学から二百二名の教員および学生が参加し、シンポジウムの他、多数の作品が展示された国際陶芸教育交流展、各国教員それぞれの制作技法による陶芸制作デモンストレーション、学生のワークショップなどをおこなった。

このシンポジウムでは、世界各国の現代陶芸文化の多様性を感じられるとともに、研究成果の発表による陶芸の専門知識の共有化や学生同士の交流が図られ、さらに、国際交流により人種間の深い相互理解がもたらされるなど、陶芸文化の国際化へ向けた貴重な一歩となった。

今後国際陶芸シンポジウムは、世界各地で開催され、陶芸研究の更なる充実と発展が期待されている。



大賞を受賞した大谷さん



第6回藝大アートプラザ大賞授賞式



学長賞(大賞) 作品「妙に清らの」大谷佳那子(美術学部工芸科(漆芸)3年)



準大賞作品「JAPANESE TRADITIONAL COLORS CRAYON
日本の伝統色クレヨン」"SAKURA"「桜」、"UME"「梅」、"KIKYO"「桔梗」
府川大吾(美術学部デザイン科3年)



準大賞作品「永遠を見る」
長尾睦美
(大学院美術研究科修士課程彫刻専攻2年)

第六回 藝大アートプラザ大賞展 3

3

第六回 藝大アートプラザ大賞展

十一月二十三日から十二月十八日までの間、
本学の藝大アートプラザで「第六回 藝大ア
ートプラザ大賞展」を開催した。

同展は、学生の制作活動の成果を広く社会に
発信するため二〇〇六年度から実施している学
内アートコンペで、第六回目となる今年度は、
「時」というテーマで募集をおこない、厳正な
審査を経て入選作品を決定し、学長賞(大賞)
や準大賞など、入選した総勢六十一名(八十六
点)の作品を、藝大アートプラザで展示・販売
した。

学長賞(大賞)には、大谷佳那子さん(美術
学部工芸科(漆芸)三年)の作品「妙に清らの」
が選出された。また、準大賞には、長尾睦美さ
ん(大学院美術研究科修士課程彫刻専攻二年)
と府川大吾さん(美術学部デザイン科三年)の
作品が選ばれた。

入選した学生は、販売の機会を得たことで社
会との交流を図りながら、アーティストとして
の自覚を持つことができる。また、この展示は、
一般の方に学生の制作活動の一端に触れていた
だく貴重な機会となっている。

今日マチ子

「自前のメディアで作品を発表
七年以上続く「センネン画報」」



一期生としてみんなで学科をつくっていった

私は、先端芸術表現科の第一期生になります。

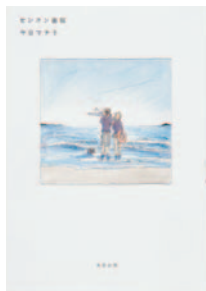
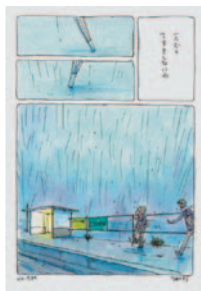
もともとイラストを描くのが好きだったのですが、職業にするのは難しいかな、と考え最初は建築科入学を目指して受験勉強をしていました。父が建築の仕事をしていたので、幼少期から建築雑誌を読んだり、建物を見るのが好きだったこともあります。ところが、受験の直前になり、東京藝大の美術学部先端芸術表現科という学科が新設されることが発表され、既存の学科の枠にとられずに、建築以外の勉強も幅広くできるかもしれないと思い、建築科の試験を受験した後、先端芸術表現科の学生として入学しました。

演劇評論が専門の長谷部浩先生のゼミに入ったのですが、学科が動き出したばかりの状況下で、当時は先端芸術表現科の教員の方全員が自分たちの先生という感じでした。学生は三十人ほどで、当然先輩も後輩もいません。そんな状況の中、みんなで学科をつくっていくような雰囲気でした。まるで兄弟のように、けんかはするし、言いたいことも言い合えて、それぞれが個性を発揮できる関係だったと思います。先端芸術表現科はキャンパスが茨城県取手市にあるため、学生は取手の近辺に下宿している人が多く、授業の後や、課題を制作する時など、誰かの家に集まって制作することがよくありましたね。

自分のメディアで描いたものを発信していく

学生時代の経験で今につながっていることといえば、自分でミニコミを発行して、流通に乗せ、Webにも載せるといった作業をしていたことでしょうか。新しいメディアをつくり、作品を発表するというスタイルですね。漫画を描きあげても、いきなり大きな雑誌に載せることはハードルが高い。自分が描きたいものを描くだけではなく、なおかつ読者に届くまでがひとつの作品だと思ってやっていました。今でも自分が最後までコントロールできるメディアを持っていたという気持ちがあり、Web上での連載を長い間続けているのです。

一方、メディアの形に合わせて自分が何をつくることができるのか、について考えることも好きなので、いわゆるメジャー誌で描くこともおもしろいです。そういうメディアでは、より多くの人に届くような表現



右：『センネン画報』（太田出版）
左：「今日マチ子のセンネン画報」より
<http://juicyfruit.exblog.jp/>

や、普遍性をもった表現を心がけています。またアートに理解がある雑誌や媒体でしたら、思いきり実験的なことをして、読者を喜ばせたいという気持ちもあります。

七年以上Web上で連載を続けている「センネン画報」は、新しいテクニックや新しい描き方を開発していくような場所で、それを自分だけのものにしないで、読者の方にも見ていただいている、ということになりますね。ミニコミを出していた時は、取材をした事実を描くというスタイルでしたが、何か自分の物語のようなものを描いてみたい、という思いが少しずつ湧いてきて、今では一作ごとのストーリーを描きたいと思うようになりました。

学生だからできる人との出会い

大学生活の四年間は本当にあつというんです。

私自身、一年生の時には、自分のテーマが見つからないという状態で、ただ課題をこなしているうちに二年生になってしまったのです。そのことを長谷部先生に相談したところ、私が無駄に感じていた長い通学時間を利用して何か描いてみたら、とおっしゃっていただき、それにピンときて電車の中で絵を描き始めるようになりました。ですので、先生にはとても感謝しています。

学生のうちに、学内外を問わず、いろいろな人と会ったり、教えを請うことはよいことだと思っています。私も藝大在学中に、興味のあるアーティストにメールを出してみたり、会ったりしたことがあるのですが、社会人になると、なかなかそういうことができなくなります。藝大の学生だといえれば相手の方も安心しますし、芸術家を志していることをすぐに理解してもらえます。そういう特権は大いに利用して、積極的に世界を広げてほしいですね。

ジャンルというものは自分でつくり出していくものだと思います。それを自分の中で熟成させてつくっていくことはできるかもしれませんが、それよりも、外に刺激を求めて新しいことを見い出すほうがより早いのではないのでしょうか。それにより、社会性も育むことができます。なかには受験の時の絵が一番うまくて、そこで止まってしまう人もいますが、そういうことはもったいないな、と思います。

卒業した今、思うことは、藝大の講義はとても魅力的なものが多かったということです。ですので、在校生の皆さんには、そのありがたさを

十分に感じてほしいと思っています。また、卒業生の立場でいえば、例えば、卒業生が気軽に参加できるような講座があると嬉しいですね。また、卒業生と在校生がコミュニケーションできる機会があれば、在校生の皆さんが将来のことを具体的に考えるきっかけになりますから、そういう場があるといいな、と思いますね。



きょう・まちこ

漫画家。1980年、東京都生まれ。女子学院中学校・高等学校を経て、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科、セツ・モードセミナー卒業。2000年～2004年にミニコミ誌「Juicy Fruits」を発行。2004年よりブログ「今日マチ子のセンネン画報」を更新。2005年「ほぼ日マンガ大賞」入賞、2006年、2007年、2010年文化庁メディア芸術祭マンガ部門で「審査委員会推薦作品」に選出。著書に『センネン画報』『セキ☆ララ中学受験』『みかこさん』『100番めの羊』『七ヶ委員 星に願いを篇』『cococon』『かことみらい』『炭酸水の底』ほかがある。



本格的な能舞台の上で繰り広げられる熱気に満ちた授業は、キャンパスの中にいることを忘れてしまうほどだ

藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

研究室探訪

Visiting the Laboratory

第三回

音楽学部邦楽科 能楽専攻 関根知孝教授

Department of Traditional Japanese Music, Nob Course
Professor SEKINE Tomotaka

上野キャンパス、音楽学部練習ホール館
二階の一室の重い扉を開けると、そこには
思わず目を見張る光景が現れる。近代的な
建物の中に、清々しくも荘重な能舞台が設
けられているのだ。舞台真正面の鏡板には
老松が、その右手の板には若竹が描かれ、
左手からは橋掛りが延びる。あくまでも稽
古用の舞台とはいえ、ここが大学構内であ
ることに誰もが驚くことだろう。

東京藝大における邦楽教育は、一八七九
(明治十二)年、当時の文部省内に設置され
た音楽取調掛にまでさかのぼる歴史をも
つ。藝大の前身である東京音楽学校を経て、
一九三六(昭和十一)年に邦楽科が誕生(能
楽・箏曲・長唄)。戦後、新制大学に移行
し、音楽学部が発足してからも、日本の芸
術系大学で唯一の邦楽科として伝統音楽の
教育研究に取り組んでいる。能楽の四座一
流(観世・金春・宝生・金剛・喜多)の中で、
藝大では観世流と宝生流の専攻があり、そ
れぞれの教員が指導にあたっている。今回
取材した観世流シテ方の関根知孝教授は藝
大邦楽科の卒業生でもある。関根教授によ
れば、能楽とはまず演者が「三間四方の舞
台」というキャンパスの中の空気を、曲の趣
に染めていくのが基本だという。

この日は、普段着物・袴姿の仕舞で「春
日龍神」と「屋島」の授業風景を見ることが
できた。関根教授は見台に向かい、張扇で
拍子を取りながら学生に稽古をつける。そ
して、拍子をとる手をたびたび休め、自身
が舞台にあがり形を見せるのだ。「能楽はな
によりも重心が大事です。肩、腰、股関節



を意識しながら、しかも形を崩さず、無駄な力を抜いて舞うことが必要です」。体の軸のとり方、腹のすえ方、足の運び方など自ら手本を示すとともに、ときには厳しく、ときにはユニークな比喻を交えながら学生を導いていく。

「謡のリズム、声音、筋の理解が重要であることはいうまでもありません。きれいに舞うのがうまいだけでは形にならないことを肌で感じてもらいたいですね」。

現在、能楽専攻の在校生の約六割は能楽師の家庭で育ち、残りの四割は一般の家庭の出身だという。小野里泰輝さん(学部三年生)は、父親が能楽師で藝大邦楽科の卒業生でもある。六歳から父親や別の能楽師にも学んでいるが、関根教授の指導はより細かく具体的なのだそうだ。「例えば話がおもしろいですし、どのレベルの学生にも分け隔てなく、根気よく稽古をつけてくださっています」。馬場加奈子さん(学部一年生)は、他大学でアートマネージメントを学び、日本の伝統芸能・音楽のルーツを探る中で能楽と出合った。関根先生の指導はわかりやすいですし、生活や自然界の全てに目配りをされていると感じます」。

能楽は武士の平常時の習練としても奨励されたほどのもので、精神的にも肉体的にも厳しさが要求される。「目に映る、心に浮かぶものを、芸に取り入れること」は関根教授にとつての師匠家にあたる宗家、先々代二十四世観世左近の言葉。「行住坐臥」の言葉のとおり、能楽は普段の立ち居振る舞いがそのまま舞台に出てくるというが、その奥深い世界の一端が垣間見える授業風景だった。

上野の 寄り道 散歩道

第5回

「甘味とスイーツ」

東京藝術大学がある上野は、歴史や伝統と新しい文化が交差するスポットとして、観光に訪れる人も多い。藝大のすぐ近くにも、由緒ある杜寺や老舗、意外なエピソードを秘めた穴場が目白押しだ。大学から少しだけ足を延ばして、小さな旅に出てみよう。



東京藝大の北側、徳川家の菩提寺・寛永寺のお膝元である上野桜木のあたりは甘いお菓子の宝庫である。

東京メトロ千代田線根津駅から藝大に向かうとき、誰もが目をとめるのが「風土菓桃林堂」だ。一九二五(大正十四)年の創業で、本社は大阪府八尾市にある。この名物「小鯛焼」は、小さいながらも丹波大納言を用いた粒餡がつまった逸品。季節の和菓子も目に美しく食べることが惜しいほどだ。店舗内の喫茶スペースで、お菓子とお抹茶を楽しめるのもうれしい。

言問通りの上野桜木交差点には「旧吉田屋酒店」を移築した台東区立下町風俗資料館付設展示場が建つ。そこから千駄木方面に向かう左手にも古いたずまいの和菓子舗が一軒。一九〇〇(明治三十三年)創業の「谷中岡栴栄泉」である。伝統の製法を守り、一つずつ手づくりで無添加の和菓子は、わざわざ遠方から買い求めにくる人がいるほどの品。こし餡たっぷり「豆大福」の皮に生姜が入っているのは、このあたりが「谷中生姜」の産地だったことによるもの。これぞ江戸下町の味わいだ。

1

風土菓
桃林堂 上野店

台東区上野桜木一―五―七
写真は冬季限定の「椿餅」、ペー
ジ右下が「小鯛焼」。店内でお抹
茶と味わうのは格別。



2

谷中 岡栴栄泉

台東区谷中六―一―二六
名物「豆大福」はふんだんに用
いた赤えんどうも滋味深い。
ほかには生姜入りの谷中名菓
「浮草」も。

台東区上野桜木二ー九一八
写真手前がレモンシロップ味
の定番「オーギョーチ」、奥が
「チークリームワイン」。

愛玉子

3



台東区上野桜木二ー九一八
写真の「上野の山のモンブラン」や「特製梅ロール」などケー
キのほか焼き菓子も自慢。

パティシエ イナムラシヨウゾウ

4



「岡林栄泉」の向かいにあるレトロモダンな建物の黄色い看板は、この界限でもとてもよく目立つ。店名にもなっているこの店の名物「愛玉子」(オーギョーチ)は、台湾の新高山の山麓に密生する植物で、カロリーは米と同じくらいあり、肝臓の妙薬といわれているとのこと。その果実状の種子を加工した寒天風のゼリーに、シロップやアルコール類をかけて供されるデザート。ゼリーの食感とそこからまるレモンシロップやワインの風味がやみつきになる。創業は一九三四(昭和九年)で、建物は戦後の復興だが、備え付けの革張りの椅子は創業当時の面影を今に伝える。

谷中霊園方面に足を延ばすと、フランス菓子の名店「パティシエイナムラシヨウゾウ」がある。店先に行列ができるほどの人気で、ぜひ味わいたいのは「上野の山のモンブラン」だ。こんもりとした小山の形のスイーツは、藝大周辺の散歩のイメージにぴったりだ

上野の杜の 波瀾 万丈

第十三回

日本美術の保護 後篇

吉田千鶴子

本学の歴史と浅からぬ縁がある世界文化遺産「中尊寺金色堂」。
東京美術学校による金色堂修理は国宝修理の先駆けとなった。

中尊寺金色堂の修理

昨年六月、小笠原諸島が世界自然遺産に、中尊寺・毛越寺とその周辺が世界文化遺産に登録されたことは、東日本大震災後の暗雲を少し吹き払ってくれたかのような朗報であった。特に中尊寺は、本学の歴史と浅からぬ縁があるのでなおさらだ。

一八九六(明治二十九年)年の古社寺保存会の設置と翌一八九七(明治三十一年)年の古社寺保存法の公布により、わが国の文化財保護の基本ができたことは周知のことだが、このとき二万円余りの国庫補助を受けて最初の修理がおこなわれたのが中尊寺金色堂内および寺宝類であり、修理を担当したのが岡倉天心率いる東京美術学校(以下、「美校」という)だった。もちろん、それを決定したのは古社寺保存会だったにせよ、いち早く美校が担当することにし、異論を封じるかのごとく古社寺保存法公布の四カ月も前に工事に着手することができたのは、同会委員にし

て美校校長兼帝国博物館美術部長であった天心の実力と持ち前の機略の結果にはかならない。

修理担当を命ぜられたのは美校助教教授の六角紫水と大村西崖(ともに美校一期生)、雇の新納忠之介(同三期生)と亀田徳太郎(同)および研究科生の木村武山・高橋島谷・菅原大三郎・武谷富造・石河寿衛彦・本島袈裟彦・松田為賀・氏家静修、四年生の児島明、三年生の澤木彦門・三村耕三、卒業生の秋月復郎・佐藤栄三郎と嘱託教師の伊東忠太で、みな一応の知識や技術を身につけていたとはいえ、修理の経験などない青年たちであり、しかも一同当惑するほど金色堂は破損していたが、彼らは当時としては最大限の学術的見地に立って、真摯な研究の姿勢で修理に臨んだ。地元の新聞などもそれを好意的に報じている。

天心や今泉雄作は、明治維新直後からの町田久成ら先覚の実績を土台に、十数年にわたって日本美術保護制度樹立の準備を推し進めたのであるが、その一環として実施した全国的古美術調査の折にしばしば無謀な修理の例を目にし、一刻も早く学術的見地に立った新しい修理法、

つまり、現今の古美術修理の原則である「現状維持修理」を普及させる必要があると考え、実施し始めていた。金色堂修理もその方針をとったことは、紫水の「現在あるものを今後減らさぬ様にする。修繕は復元するのが目的であるが、つけ足しはしないと云う建前で始めた。」(中尊寺修理について『六角紫水の古社寺調査日記』所収)という言葉からも窺い知れる。

修理落成式

金色堂その他の修理が完了した一八九八(明治三十一年)年五月二十九日、それを記念して法要・完成式典・宝物展観・能狂言などが華やかに挙行された。平泉駅は入出を予測して前日に開通されたばかり。この小さな駅に当日は七千人を超える乗降客があったと地元紙が伝えている。これより参拝客が一段と増えたらしい。

ただし、この盛大な催しも、事情を知るものにとつては一抹の寂しさがあった。式典に列席すべき天心ないし紫水、新納らは二カ月前の美

校騒動で辞職してしまい、代わりに美校代表として式典に派遣されたのは、漆工家の辻村松華だったのである。中尊寺には修理の経過を把握できる記録文書綴が保存されているが、その末尾のあたりに綴じ込まれている修繕事務所の中尊寺側一同の天心宛書簡控え(明治三十一年四月八日付)には天心の配慮のお蔭で修理が落成に近づいたことへの感謝の辞とともに、辞職に対する落胆の情が生々しく表明されていて印象的だ。

修理の成果について

金色堂は一九六二(昭和三十一年)年から七年をかけて解体大修理がおこなわれ、木造鞘堂の代わりにコンクリートの覆堂が設けられるなど、保護環境が整えられて現在の姿となった。そのため、明治期の美校による修理は影が薄くなっってしまったが、ある意味でそれは昭和の大修理に勝るとも劣らない歴史的意義があるといえる。なぜなら「現状維持修理」による国宝修理

のモデルケースになっただけでなく、人材育成にも大きく貢献したからである。たとえば、修理担当者のかの六角紫水がのちに漆芸制作・研究において、大村西崖が東洋美術史学において、新納忠之介が国宝修理において、伊東忠太が日本建築史学・建築設計において輝かしい業績をあげたことなどはその顕著な事例である。

天心は美学・美術史の学識を有し、また、国策としての日本美術保護・奨励論にもよく通じていたが、一八八四(明治十七)年の法隆寺夢殿救世観音との対面を「一生の最快事なり」と生徒に語ったように、理窟ではなく自分の目で古美術を見て強い感動と喜びを覚えたことから日本美術のために身を挺することになった。感動こそ美術にたずさわる者の最大のエネルギー源であることを体得していたため、後進にも見学・修理・模写模刻などを通して直に古美術に接する機会を与えようと努めた。金色堂修理の場合も、修理自体を完璧に遂行するだけでなく、前途ある青年たちがまず美に感動し、研究心を起こし、それぞれが美術の分野で成長していく土台を作るよう期待したのである。

(よしだ・ちづこ／美術学部教育資料編纂室講師)

次号予告

「東京音楽学校と邦楽科問題」

橋本久美子

東京音楽学校において、邦楽教育は初期よりおこなわれていたが、一九三六(昭和十一)年に初めて「科」として設置された。同校における邦楽をとりあげる。



中尊寺金色堂内(中尊寺所蔵写真)



新納忠之介



大村西崖



六角紫水

Exhibition & Concert

Information

展覧会 & 演奏会 情報

TOPIC I

近代洋画の開拓者 高橋由一

TAKAHASHI Yuichi

《鮭》や《花魁》(いずれも重要文化財)、あるいは《豆腐》《山形市街図》を描いた画家として知られている、明治時代を代表する洋画家、高橋由一の全貌を紹介する展覧会です。

明治維新後に丁髷を落とし「由一」を名乗るところから、近代洋画の父と呼ばれる高橋由一の活躍がはじまります。この時すでに40歳を超していました。絵が好きで画家になりました、といった甘さは微塵もなく、洋画を日本に普及するのが自分の果たすべき使命だという強い自負にあふれていました。画塾を開き、展覧会を催し、美術雑誌を刊行し、ユニークな美術館建設構想も抱きました。日本には洋画が必要なのだ、ということをも必死になって世間にうったえたのです。由一には留学経験がありませんが、本場の西洋画を知らずに写実に挑んだ男が生み出した油絵だからこそ、黒田清輝以降の日本洋画の流れとは一線を画す「和製油画」として日本的な写実を感じさせるのです。

本展では、由一の代表作を網羅し、初期から晩年までの作品を一堂に紹介するほか、イメージソースとなった広重や司馬江漢らの作品、あるいは「由一史料」と呼ばれる文書類もあわせて展示し、「近代洋画の開拓者」高橋由一の魅力を探ります。



右：《鮭》 重要文化財 東京藝術大学 1877年頃
左：《花魁》重要文化財 東京藝術大学 1872年

展覧会スケジュール (2012年1月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。)

大学美術館本館

4月 5日(木)～ 6月24日(日)	芸大コレクション展 春の名品選	入場料：一般300円 学生100円(中学生以下は無料)
4月28日(土)～ 6月24日(日)	近代洋画の開拓者 高橋由一	入場料：一般1,300円 学生800円(中学生以下は無料)
7月12日(木)～ 9月17日(月・祝)	日中国交正常化40周年記念 特別展「草原の王朝 契丹一美しき3人のプリンセス」	入場料：一般1,400円 学生800円(中学生以下は無料)

陳列館

3月20日(火・祝)～ 4月 8日(日)	大西博回顧展 一幻景一	入場料：無料
4月26日(木)～ 4月30日(月・祝)(予定)	保存彫刻研究報告発表展(仮称)	入場料：無料
6月 8日(金)～ 6月17日(日)(予定)	助助展(仮称)	入場料：無料

正木記念館

予定はございません。

※ 開館時間は、10:00～17:00(入館時間は16:30まで)。月曜休館。
ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日に休館することがあります。
なお、展覧会によっては、開館時間および休館日が異なる場合がございますので、その都度ご確認ください。

※ 展覧会の名称・会期については、変更することがございます。

※ 本学には駐車場はございませんので、お車での来館はご遠慮ください。

※ 展覧会についてのお問い合わせ先
● ハローダイヤル TEL：03-5777-8600
● 大学美術館 TEL：050-5525-2200

※ 展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでご覧になれます。
<http://www.geidai.ac.jp/museum/>

演奏会スケジュール（2012年1月31日現在の情報です。今後予告なく変更することがございます。）

奏楽堂

4月14日(土)	同声会新人演奏会 <第1部> <第2部>	13:00開演 18:00開演	2,000円 (第1部・第2部通し券)	自由席
4月20日(金)	藝大フィルハーモニア定期新卒業生紹介演奏会	18:30開演	1,500円	自由席
5月19日(土)	藝大プロジェクト2012「幕末～その時、世界は？」 第1回 ロマン主義とナショナリズム	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:20開演	2,000円	自由席
5月24日(木)	学生オーケストラ定期演奏会	19:00開演	1,500円	自由席
5月26日(土)	藝大プロジェクト2012「幕末～その時、世界は？」 第2回 海を渡った浮世絵～文化文政期の日本音楽	<レクチャー> 15:00～ <コンサート> 16:20開演	2,000円	自由席
5月27日(日)	上野の森オルガンシリーズ 神秘のJ.S. バッハ	15:00開演	2,000円	自由席
6月1日(金)	藝大21 創造の杜 リーム Wolfgang Rihm	<プレトーク> 18:15～ <コンサート> 19:00開演	2,000円	自由席
6月2日(土)	室内楽コンサート ライブツィヒ弦楽四重奏団を迎えて 第1日	15:00開演	2,000円	自由席
6月8日(金)	室内楽コンサート ライブツィヒ弦楽四重奏団を迎えて 第2日	19:00開演	2,000円	自由席
6月16日(土)	学長と語ろうXI ゲスト：林英哲(和太鼓奏者)	15:00開演	無料(事前申込制)	指定席
6月21日(木)	藝大フィルハーモニア定期演奏会	19:00開演	2,000円	自由席
6月26日(火)	学生オーケストラプロムナードコンサート	11:00開演	無料	自由席
6月30日(土)	東京藝大チェンバーオーケストラ定期演奏会	15:00開演	1,500円	自由席
7月5日(木)	藝大プラス学内演奏会	19:00開演	無料	自由席
7月7日(土)	藝大21 藝大とあそぼう「現代音楽なんてこわくない」	15:00開演	入場料未定	自由席
7月21日(土)	藝大21 時の響き JAZZin 藝大「語りとJAZZ」	15:00開演	3,000円	指定席
7月26日(木)	ベルリン芸術大学交流演奏会(仮)	15:00開演	入場料未定	自由席
7月未定	管打楽器シリーズ	19:00開演	2,000円	自由席
9月29日(土)	藝大オペラ定期公演「ドン・ジョバンニ」第1日	14:00開演	入場料未定	指定席
9月30日(日)	藝大オペラ定期公演「ドン・ジョバンニ」第2日	14:00開演	入場料未定	指定席

モーニング・コンサート	4月26日、5月10日、17日、24日、6月7日、14日、7月5日、12日(いずれも木曜日)、9月12日(水曜日)	11:00開演	無料(要整理券)	自由席
-------------	---	---------	----------	-----

※ 特にお断りのない限り、コンサートの会場はすべて本学構内の奏楽堂です。

※ 詳細につきましては、2月末発行予定の「平成24年度コンサートスケジュール(前期版)」をご覧ください。

※ 演奏会の曲目、開演時間などの詳細については、決定次第、大学ホームページで発表いたします。http://www.geidai.ac.jp/

※ 本学には駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。

※ スケジュール・曲目・出演者等は都合により変更となる場合がございますので、ご了承ください。

※ チケットの取り扱い

- 藝大アートプラザ TEL: 050-5525-2102
- ヴォートル・チケットセンター TEL: 03-5355-1280 http://ticket.votre.co.jp/
- チケットぴあ TEL: 0570-02-9999 http://t.pia.jp/
- (一部携帯電話・PHS・IP電話はご利用いただくことができません。)
- 東京文化会館チケットサービス TEL: 03-5685-0650 http://c11sbany.securesites.net/ticket/
- イープラス(e+) http://eplus.jp/

※ 演奏会についてのお問い合わせ先

- 演奏芸術センター TEL: 050-5525-2300



2011年10月8日(土)「元禄～その時、世界は？」
第3回「西と東～もしも鎖国がなかったら」公演より ©TAKE-O

TOPIC

2

藝大プロジェクト2012 「幕末～その時、世界は？」シリーズ

平成23年度よりスタートした藝大プロジェクト「その時、世界は？」シリーズ。初年度は「元禄時代」に注目し、都合5回のレクチャー&コンサートを開催いたしました。洋の東西はもちろん、音楽だけでなく美術にも焦点を当てたこれらの演奏会は、どれも藝大ならではのユニークな切り口で好評でした。そして2年目の平成24年度は100年ほど時代が下り、幕末の時代を扱います。

19世紀、ヨーロッパではナショナリズムが勃興し、さまざまな局面で、民族のアイデンティティが強く求められるようになりました。

わが日本でも1853年、ペリー率いる黒船が浦賀沖に現れ、「鎖国制度」を通じて築き上げてきた平和と繁栄が、脅かされる事態となります。19世紀は徳川幕藩体制が崩壊し、明治維新へと向かう激動の時代であり、黒船によってもたらされた外来音楽が、その後のわが国の芸術状況を大きく変える端緒ともなりました。今回も音楽学部・美術学部双方が結集して展開するこのシリーズにご期待ください。

出版会活動

◆『美術と教育のあいだ』を 八月十五日より発売

本書は、実技制作と理論研究とを二つの柱にした本学の美術教育研究室に所属する十五人の執筆者が、美術制作者、教育者、理論研究者というそれぞれの立場から、美術と教育の関係をあらためて見つめ直した初めての論文集。

『美術と教育のあいだ』をつなぐことで美術と教育それぞれについて根源的に考え、今日の社会における新たな美術教育の有効性を見出すことを目指したもの。



◆『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』を 十月三十日より発売

大正と昭和戦前期の東京音楽学校教授・小倉末子は日本初の国際級のピアニストであった。小倉の東京音楽学校入学から百年目に書かれた本書は、小倉末子の掘り起こしをおこなってきた津上が小倉の足跡を追い、本学の学史研究に携わる橋本が東京音楽学校史から小倉を捉えることで、小倉像を複眼的に照射する。

本書の意義を明示する大角の序論、五名の研究者（塩津洋子、武石みどり、辻浩子、戸ノ下達也、藤本寛子）によるコラム、巻末附録に略年表と演奏活動一覧があり、洋楽史研究に欠かせない一冊となっている。



◆『高山登「枕木―白い闇×黒い闇の軌跡」』を 十一月十五日より発売

二〇一一年三月十一日、われわれの存在自体を揺るがした震災と原発事故。一九六〇年代後半以降、日本の現代美術において常にその存在を顕し続ける美術家・高山登は、仙台・気仙沼に自宅とアトリエをもち、いま改めて「闇」について考える。

本書は、高山の「枕木―人柱」による重厚な作品世界、生きてきた時代と記憶、そして震災後を生きる姿勢を描きだす。活動初期からの枕木による作品群、貴重なパフォーミングやドローイングなど一八〇点におよぶ図版を収録。



東京藝術大学出版会の出版物等は、本学藝大アートプラザ、アマゾン（ネット販売）および一般書店にて取り扱っております。詳しくは、藝大アートプラザ（〇五〇―五五二五―二一〇二）まで

交流

◆大学間国際交流協定締結

十二月二十九日、陝西師範大学音楽学院と本学音楽学部は、芸術（音楽）に関する交流を深めるとともに、教育および研究に関する協力をおこなうことに合意し、芸術国際交流協定を締結した。

この調印により、本学における交流協定締結校は、十七カ国（地域）、四十九大学などとなった。

運営

◆東京藝大教員有志へ文化庁長官から 感謝状贈呈

八月二日、旧文部省庁舎における、東日本大震災被災文化財等救援・修復活動への援助者に対する感謝状贈呈式で、本学の教員有志を代表し、三田村有純教授（藝大アートプラザ所長）に文化庁長官から感謝状が手渡された。

東日本大震災を受け、本学で六月一日から七月十日までの間におこなった、名誉教授を含む教員有志の出品による「東京藝大教員有志による被災地復興支援・文化財救援 作品展」の開催と、それに伴う売上金の寄附を受けたもの。

受章・受賞

◆佐藤雅彦教授が 「日本数学会賞出版賞」を受賞

三月十八日、大学院映像研究科メディアア映像専攻の佐藤雅彦教授の著書『日常にひそむ数理曲線 Double Curve』が、出版活動などの著作活動により、数学の研究・教育・普及に顕著な業績をあげた活動を顕彰することを目的とする日本数学会賞出版賞を受賞した。

受賞にあたり、「放物線や双曲線、クロソイド曲線などの数理曲線を、身近な日常生活の中に発見し、巧みな演出で映像化し、実に見やすい上に、数学的思考の普及に資するところ大である」と評された。

◆吉村誠司准教授が 「第十七回 足立美術館賞」を受賞

美術学部絵画科（日本画）の吉村誠司准教授の作品「陽光」が、平成二十三年、第十七回足立美術館賞を受賞した。

この賞は、将来性ある日本画家の育成を目的とし、毎年九月に開催される院展の中から、優秀かつ同美術館にふさわしい作品を一点選考し、同時に買い上げをおこなっているもの。

◆東日本大震災被災文化財の救援と 復旧のための募金

本学と台東区は、八月二日から二十一日までと九月九日から二十五日まで、本学の大学美術館で開催した、「今、美術の力で―被災地美術館所蔵作品から―」「区長賞創設三十周年記念 台東区コレクション展」ほかの展覧会において、被災文化財の救援と復旧のために募金箱を設置し、ご来場のお客様から、合計一〇万六千七百八十八円のご寄附をいただいた。

寄附金は、文化庁の文化財レスキュー事業を実施するための寄附金、義援金の窓口となっている公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団に寄附をおこなった（外国

◆園部秀徳講師が神戸ビエンナーレ2011 「グリーンアート」コンペティション 「神戸ビエンナーレ大賞」を受賞

十月二十一日、大学院美術研究科工芸専攻（木工芸）の園部秀徳講師の作品「配置された木」が、「グリーン（根付の生きた植物）」を用い、アーティストの自由な発想と方法で、アートの力と可能性を斬新に表現する「グリーンアート」コンペティションで、神戸ビエンナーレ大賞を受賞した。

「一つの樹種を素材にして生命存在の広がりを考えさせる秀逸な作品」として審査員一同から高く評価されたことによる受賞。

◆東京藝術大学カレンダー・2012（楽器編） が第六十三回全国カレンダー展において 「日本商工会議所会頭賞」を受賞

十二月二十六日、本学として初めて応募した第六十三回全国カレンダー展において、「東京藝術大学カレンダー・2012（楽器編）」が、「日本商工会議所会頭賞」を受賞した。

「日本商工会議所会頭賞」は、応募のあった全作品の中から実用性に富み、総合的に優れている作品に与えられるもの。

◆平成二十三年度「藝祭」

九月二日から四日まで、本学上野校地において、毎年恒例となっている藝術祭（藝祭）を開催した。

今年のテーマは「浮世のアイディアで、三月十一日に発生した東日本大震災に対し、文化芸術をもって人々の元気を表現しよう」との思いから、「浮世を再生する」という趣旨のテーマを掲げたもの。

台風の影響で一時間催が危ぶまれたが、初



第24号刊行にあたって

本号の表紙は大学院映像研究科教授の佐藤雅彦氏に飾っていただき、巻頭インタビューでは、氏の知性と独創性に満ちた発想がどこからくるのかを垣間見ることができます。

また、連載「卒業生に聞く。」は、日頃ほとんどメディアに登場しない美術学部先端芸術表現科卒業の人氣漫画家、今日マチ子氏の在学時代を語っていただいた貴重な記事です。さらに、「研究室探訪」では、音楽学部邦楽科能楽専攻の関根知孝教授の研究室を訪ねており、日頃触れることのない凜然とした稽古の空気感が迫ってきます。

他のどの記事を見ても、他のどの媒体でもなし得ない東京藝術大学独自のコンテンツに満ちており、単純に読み物として興味をそそるものばかりです。ぜひお楽しみください。

藝大通信編集長
松下 計

展覧会・演奏会の最新情報は、東京藝術大学公式 Web サイト (<http://www.geidai.ac.jp/>) をご覧ください。

● 展覧会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学大学美術館
Tel. 050-5525-2200
NTT ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

● 演奏会についてのお問い合わせ先

東京藝術大学演奏芸術センター
Tel. 050-5525-2300

● 演奏会チケットの取り扱い

藝大アートプラザ
Tel. 050-5525-2102
ヴォートル・チケットセンター
Tel. 03-5355-1280
チケットぴあ
Tel. 0570-02-9999
(一部携帯電話・PHS・IP 電話はご利用いただくことができません。)
東京文化会館チケットサービス
Tel. 03-5685-0650

● 藝大アートプラザのご案内

Tel. 050-5525-2102

日は、美術・音楽学部の一年生が暑い夏にも負けず制作に励んだ八基の神輿が、サンパ隊に導かれながら上野公園内を練り歩き、多くの人々の注目を浴びた。そのほか、大学構内でのさまざまな展示や演奏会、模擬店など、学生の熱い思いが感じられる三日間であった。

◆ 藝大アート・スペシャル 東京丸の内

十月二十五日から三十日まで、本学と三菱地所株式会社が共同主催する「藝大アート・東京丸の内」が、丸ビル（東京都千代田区丸の内）において開催された。

同イベントは、本学の若さ溢れる逸材により、丸の内からさまざまな文化・芸術を発信するもので、五年目の今回も、六日間の開催で、二万七五〇〇人を超える来場者を迎え、大盛況であった。

初日の目玉は、宮田亮平学長と長谷川閑史経済同友会代表幹事のスペシャル対談。二日目以降も、オリジナルオペラ公演「カルメンとロートレック」や大学院映像研究科アニメーション専攻による、「藝大アニメーション・音・ステージ 2021」を開催するなど、連日多彩なプログラムを展開した。



◆ 藝大アート・スペシャル 2021

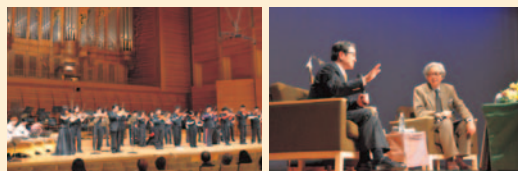
「学長と語ろう」 奏楽堂トーク＆コンサート 「障がいとあーと」

十一月十九日、二十日の両日、本学奏楽堂で、藝大アート・スペシャル 2021 を開催した。今回は、「学長と語ろう トーク＆コンサート」が十回目の節目にあたることから、映画監督の山田洋次氏をゲストに迎えた「学長と語ろう トーク＆コンサート」と、「障がいとあーと」の公演を二日連続でおこない、前者には約八〇〇名、後者には約七〇〇名の来場者があった。

一日目の「学長と語ろう トーク＆コンサート」第一部では、「藝術のもたらすもの」というテーマで、山田監督の『男はつらいよ』シリーズなどの映像がスクリーンに映しだされるなか、映画監督の視点による芸術のとりえ方などが山田監督の口から語られ、貴重な対談となった。第二部では、本学音楽学部の山本正治教授の指揮による東京藝大ウインドオーケストラが映画音楽を演奏し、『男はつらいよ』主題歌では、同じく音楽学部の多田羅迪夫教授の豊かな歌声が奏楽堂にこだまし、山田監督はもとより、来場者の心を寛さんの世界へと誘った。

二日目の「障がいとあーと」公演では、美術・音楽学部の学生が筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒たちとおこなった半年にわたる交流の成果を「障がいとあーと展」として展示。また、ダウン症を患いながらも絵を描くことに目覚めた中国の天才画家、羅錚の作品『海』も展示され、見る者の心を和ませた。

プレコンサートでは、ヴァイオリンなどを手にした筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒たちが、音楽学部の学生による筆などの伴奏と息のあった演奏を披露。そして本番のコンサートでは、シルヴァン・カンブルランの指揮による藝大フィルハーモニアが、羅錚が『海』という油絵を描くきっかけとなったドビュッシーの『海』などの演奏をおこない、一般の観客と広く招かれた障がい者とが、同じ空間と空気を共有し、心温まる気持ちで演奏会を楽しんだ。



◆ 宮田亮平学長が平成二十三年度 荒川区特別功労者として表彰

十一月二十五日、宮田亮平学長が、多年にわたる荒川区の発展のために力を尽くした方を対象とする荒川区特別功労者として表彰された。



本学の学長として、荒川区との連携を積極的に進め、区民が芸術を身近に感じられる環境整備に尽力するとともに、荒川区芸術文化振興プランの策定など、区の芸術文化事業の推進に大きく貢献し、区の発展に顕著な功労があったことが表彰の理由。

◆ 藝大フレンズ加入者状況

加入者数（平成二十四年一月三十一日現在）
賛助フレンズ 個人二九名 法人四団体
特別賛助フレンズ 個人九名

◆ 今年度下半期に開催された 主な展覧会、演奏会記録

『大学美術館』
今、美術の力で
―被災地美術館所蔵作品から―
会期 八月二日〜八月二十二日
入場者数 七〇三四名

国宝 源氏物語絵巻に挑む

―東京藝術大学 現状模写―
会期 九月九日〜九月二十五日
入場者数 一万三一五六名
区長賞創設三十周年記念
台東区コレクション展
会期 九月九日〜九月二十五日
入場者数 九四一八名
彫刻の時間―継承と展開
会期 十月七日〜十一月六日
入場者数 七八三四名

『奏楽堂』

オペラ定期 第五十七回
『コジ・ファン・トゥッテ』
開催日 十月一日、二日
入場者数 八〇九名、八〇八名
藝大フィルハーモニア・合唱定期
第三四九回
開催日 十一月十八日
入場者数 八八一七名
吹奏楽定期 第七十七回
開催日 十一月二十三日
入場者数 八八四名
邦楽定期 第七十八回
開催日 十一月三十日
入場者数 九六〇名

東京藝術大学広報誌 藝大通信 No. 24 MARCH 2012

編集発行 東京藝術大学 藝大通信編集部